相模原マンドリン倶楽部 第16回定期演奏会

Mandolin Concert

1998年11月22日（日）午後2:00開演

グリーンホール相模大野　大ホール

Program

【 I 部 】

指 揮 ／ 宮本 皓永

「コッペリア」より 前奏曲とマズルカ …… L. Delibes
編曲：平井 朗

シンフォニア「仮面」 …… P. Mascagni
編曲：U. Bottacchiari

スペイン第１組曲 …… 鈴木 静一
第１楽章　風車とキホーテの幻想 ～ カスティリア
第２楽章　アルハンブラの丘に立ちて ～ グラナダ
第３楽章　セビリアの夜の散歩 ～ アンダルシア

【 II 部 】

指 揮 ／ 小林 淳子

悲しきワルツ …… J. Sibelius
編曲：鈴木 静一

逝ける王女のためのパヴァーヌ …… M. Ravel
編曲：鈴木 静一

「はかなき人生」より スペイン舞曲 …… M. d. Falla
編曲：鈴木 静一

ノスタルジー …… P. Silvestri

マンドリン芸術 …… G. Manente
第１楽章　Allegro Deciso
第２楽章　Adagio Cantabile
第３楽章　Tempo di Minuetto
第４楽章　Allegretto Vivacissimo

【曲目解説】

「コッペリア」より 前奏曲とマズルカ　　Leo Delibes(1836～1891)

パリで生まれたドリーブは12歳でパリ音楽院に入学、19歳でオペレッタを発表し劇音楽作曲家として知られるようになった。「コッペリア」は1870年の作である。「彼の作品は優雅典麗であり旋律は無理なく流れているが、劇的迫力に欠ける。そこにオペラへの限界があった」という音楽家もいる。

この曲は2幕よりなり、他によく知られている曲には、円舞曲、麦の穂のバラード、スラヴの主題による変奏曲、チャルダッシュ、ノクターン、自動人形の音楽、情景、人形のワルツ、祭りの飾り等がある。

シンフォニア「仮面」　　Pietro Mascagni(1863～1945)

この曲はマスカーニにより1901年1月に発表、初演されたコミック・オペラの序曲を、教え子のボッタキアリがマンドリン・オーケストラの為にシンフォニアとして編曲したものである。オペラはイタリア各地、特にローマでは大成功を収めたが、現在では存在も忘れられ、曲・内容ともに不明となっている。

ボッタキアリはその「仮面」序曲の部分を編曲するにあたり、師の作品ゆえに思い入れも強く取り組み、スコアを読むと相当苦労のあとがうかがえてくる。

日本でもしばしば演奏されているが、難解な曲想と高度な演奏技術を必要とされる曲の一つに挙げられている。曲は提示部、展開部、再現部、終結部になり、ソナタ形式を一部取り入れた形になっている。

スペイン第1組曲　　鈴木 静一(1901～1980)

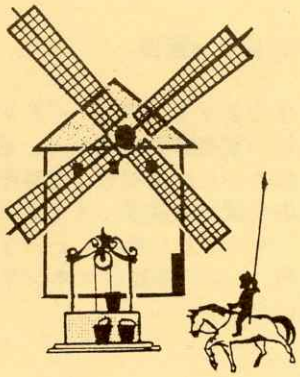
マンドリン音楽の作曲を数多く手がけている鈴木静一が昭和2年にスペインを訪れ、昭和37年～40年にまとめた曲で、以下の3楽章からなっている。

第1楽章「風車とキホーテの幻想」～ カスティリア
　のどかな田園風景とドン・キホーテ主従の幻想。

第2楽章「アルハンブラの丘に立ちて」～ グラナダ
　有名なタレガの曲にのせたアルハンブラ宮殿での陶酔。

第3楽章「セビリアの夜の散歩」～ アンダルシア
　路地、大通り、行き交う酔客とフラメンコの響き、広場の喧騒。

他にスペイン第2組曲があり、こちらは「汽車のから」「モロッコへの憧れ」「悲しき闘牛」「祝宴」の4楽章で構成されている。



悲しきワルツ　　Jean Sibelius(1865～1957)

1865年、フィンランドに生まれたシベリウスは幼い頃より音楽に親しみ、ピアノ、バイオリンを弾きこなし後に作曲を学び、数々の名曲を発表し、フィンランドを代表する作曲家となった。生涯、劇音楽に名曲を書き続けていたが、1926年以降は作品の発表はない。1957年9月のその死は国葬をもって弔われた。

本曲「悲しきワルツ」は、劇音楽「クオレマ(死）」の中の次の場面で演奏される。

『病が重く死が目前に迫っている婦人が夢うつつにワルツの調べを聞き、思わず起き上がって幻の客といっしょに踊る。やがてクライマックスに達したところで戸を叩く音によってワルツは破られる。そこには踊りのパートナーの姿はなく、戸口に死の影が立っている。』

逝ける王女のためのパヴァーヌ　　Maurice Ravel(1875～1937)

ラヴェルは、1875年フランスに生まれた。

本曲は1899年にピアノ曲として作曲されたが、後に作曲家自身の手によって1910年に管弦楽用に編曲された。17世紀に活躍したスペインの画家ヴェラスケスの描いた王妃の肖像から霊感を得てこの曲を作曲したと言われている。パヴァーヌは宮廷舞曲で、孔雀（Pave）のゆったり歩く様子から名付けられた。

「はかなき人生」より スペイン舞曲　　Manuel de Falla(1876～1946)

「はかなき人生」は近代スペイン民族楽派の代表的作曲家ファリャの手になる初めての本格的な歌劇である。グラナダを舞台に、ジプシー娘と一般市民の青年との成就しない恋を描いている。

スペイン舞曲はしばしば独立して演奏されるほか、バイオリン独奏などにも編曲され、一般に広く知られている。

ノスタルジー　　Primo Silvestri(1871～不詳)

イタリアのミラノで刊行されているマンドリン音楽雑誌「イル・プレットロ」の25周年を記念して、その主幹ヴィッツアーリ氏に贈られたものである。

ギターの分散和音に導かれマンドラが静かに主題を奏で、曲が進行するにつれ、あまりにも詩的な流れの中に自然と故郷の優しさを懐かしく思い出す。全体に内面的静寂さを保ち、副題の“言葉のない詩”をよく表現した曲である。

マンドリン芸術　　Giuseppe Manente(1867～1941)

作曲者マネンテは、イタリアのサンニオに音楽家を父として生まれ、王立陸軍軍楽学校卒業後各地の軍楽隊長を歴任し、幾多の輝かしい功績を残している。

彼の作品は管弦楽、吹奏楽、ピアノ曲をはじめ広範囲にわたるが、プレクトラム音楽に与えた彼の功績は意義深くすぐれたものであった。

「マンドリン芸術」という題は、今世紀初めにジェノバにおいて発行されていた「マンドリン芸術」という雑誌にマネンテが譜を掲載したために付けられたもので、曲の内容とはそれほど関係はない。

ごあいさつ

苦労して、苦労して弾けるようになった曲ほど、愛着が湧くものです。好きになれば練習も楽しくなり、その心が音楽として流れる筈です。「こんな素晴らしい曲だから、是非聴いて欲しい」という願いを音に乗せて一生懸命に演奏します。演奏の折々の盛大な拍手と“素晴らしかったよ”の一言が、単調だった練習・苦しかった練習を忘れさせてくれ、私たちの演奏にも一層の熱がこもります。素晴らしい演奏には、心からご声援をお送り下さい。

最後になりましたが、本日はお忙しい中、ご来場いただきましてありがとうございます。仲間同志の「和」を大事にして、いつまでも皆様に親しんでいただけるよう、これからも努力を続けてまいります。

相模原マンドリン倶楽部部長　　宮本　皓永

♪♪♪　マンドリンのルーツとは？　♪♪♪

ヨーロッパの博物館や美術館をまわって目につくのは宗教画が多いことで、さすがはキリスト教国という感じがする。中世の宗教画では、キリストの誕生を描いたものが多いが、その画面には奏楽の天使をよく見かける。その天使たちは歌ったり、フルートのような笛を吹いたり、タンバリンのような打楽器を叩いたり、リュートを弾いたりしている。そのリュートがマンドリンの前身である。リュートの形はそのままマンドリンに受け継がれたが、その調弦、その音楽はむしろギターに受け継がれた。

モーツァルトやベートーヴェンの時代のマンドリンは、単弦で４本乃至６本であった。もちろん羊腸弦すなわちガット弦を使った。モーツァルトは有名なオペラ、「ドン・ジョヴァンニ」の中の詠唱にマンドリンの伴奏をつけたし、そのほか少なくとも二曲歌とマンドリンの曲を作曲したし、ベートーヴェンは若い頃マンドリンとチェンバロの曲を四曲も作曲した。イタリアのアントニオ・ヴィヴァルディはマンドリンの協奏曲を数曲作った。

18 世紀にはイタリア全土にマンドリンが普及していた。地方によって弦の数や形や調弦がそれぞれちがっており、ロンバルディア風マンドリン、ミラノ風マンドリン、ナポリ風マンドリンなどと呼ばれていた。ナポリの楽器製作家パスクアーレ・ビナッチァ(1806～1882)がスチール（鋼鉄）弦を用い、それを複弦一対ずつ張り、ヴァイオリンと同様に調律したが、そこで現在のマンドリンが完成したのである。それが 1850 年前後のことで、したがって現在のマンドリンの歴史はまだ150年くらいの歴史しかないといえるのである。

（服部　正）

表紙ﾍﾟﾝ画：M. Pincherle 著「音楽の歴史」より「リュート弾き」（部分）

出 演 者

Conductor	小林　淳子	宮本　皓永			
1st Mandolin	窪田　成子	池田百合子	大矢　利夫	川崎　紘子	喜多　宗和
	仁尾　真里	濱地すぎの	木田　絹子	山崎　了三	渡辺　礼子
2nd Mandolin	福谷　隆治	藍澤　桃子	饗庭　裕子	綾部　文子	石本　友子
	野沢　孝広	藤枝　春代	舟田　徳穂	古田　栄治	本田　博子
	吉野　昌重				
Mandola Tenore	井上　昌子	安藤　恵子	伊藤　久	清水　哲夫	寺田美千代
	戸田　節子	長澤　直子	日置　和弘	笛木　和美	峯田　福代
	宮下　和子				
Mandolon Cello	飯田　正男	安藤　安臣	市川久美子	金澤　葉子	小林　淳子
	錦戸　民子	宮本　皓永			
Guitar	宮本　紀子	池上　由子	石本　久博	加登　文子	田中　厚子
	寺澤　逸子	長沢　久美	新田美佐子	野呂せつ子	原田　治
	森川　史子	柳生　秀人			
Contra Bass	金澤　慶了	鈴木　保彦			
Percussion	井上　ゆう（賛助）				

アナウンス　市川　暁三（賛助）
印　刷　（有）長谷印刷

《 クラブ紹介 》

1975年4月に県立相模原青少年会館のマンドリン教室として発足し、1977年3月に相模原マンドリン倶楽部として第1回定期演奏会を開催しました。演奏面も運営面も組織的に取りかかり、部員が一丸となって作り上げるクラブとして成長しました。マンドリン・オリジナルとクラシック・アレンジを中心に様々な曲目を演奏し、50人規模のマンドリン・オーケストラとして近年では相模原を拠点とした活動に加えて県内外でも演奏活動を行っています。

《 活動レポート 》

1997年11月　8日（土）第15回定期演奏会（相模原市 グリーンホール相模大野）
1998年　2月28日（土）青少年会館閉館お別れ会演奏（相模原市 県立青少年会館）
　　4月26日（日）神奈川マンドリン・フェスティバル（横浜市栄区 栄公会堂）
　　5月　9日（土）大正寺演奏会 昼の部（山梨県富士吉田市 河口湖パークホテル）
　　夜の部（山梨県富士吉田市 大正寺）
　　7月26日（土）関東マンドリン・フェスティバル（東京都 中央区立中央会館）
　　11月14日（土）第16回定期演奏会に向けて合宿（厚木市飯山 UJ研修センター）
　　～ 15日（日）

＃＃＃＃＃＃　相模原マンドリン倶楽部 連絡先　♭♭♭♭♭♭♭
飯田正男　　宮本皓永